

## 第28回中世哲学会大会シンポジウム報告

### 論題：中世におけるヒューマニズム

—12・13世紀—

司会 慶応義塾大学 中山 浩二郎

提題：12世紀のヒューマニズム

慶応義塾大学 柏木 英彦

提題：13世紀「ヒューマニズム」

の一考察

同志社大学 日下 昭夫

(於 関西学院大学 1979. 11. 11)

(司 会) 中山浩二郎

前年度教父時代からはじめて中世におけるヒューマニズムを論じた中世哲学会は、本年度も引き続いて12、13世紀におけるヒューマニズムの系譜をたどりつつ、シンポジウムを開いた。12世紀を柏木氏が、13世紀を日下氏が夫々分担されたが、その提題要旨は次のようなものである。

柏木氏は先ずD・ノウルズとR・サザーンの見解の検討をもって立論の手懸りとする。すなわち「西欧最初の創造的文化として deep and sympathetic humanism を認める」前者の人文主義的立場と、12世紀を修辞から論理への転換と見る立場に立っての后者の理性主義とを区別する。即ち、文学のヒューマニズムと学的ヒューマニズムとの対立を浮き彫りにしつつ12世紀と13世紀との「連続」と「非連続」との問題、いわば、自然と理性との発見という意味での連続的な面とノウルズが言う学問の権威として、より人間的な敬愛の念に立脚するという特色をもつ12世紀ヒューマニズムが同世紀後半で衰退したと指摘してその非連続の面を述べるのである。

かくて氏は、人文主義の1つの徴表として「世俗的な学としての自由学芸」すなわち、文法学〈grammatica〉、修辞学〈rhetorica〉、論理学〈dialectica〉の学習に積極的意義を認めることがサピエンティアを身につけるために必要であることを強

調する。と同時にこれら三学科が言語に関する学であることから、「言語能力の練磨を人間性の育成」のための不可欠の要素とし、「表現」*eloquentia* と「思念」*sapientia* との一致に人間性の完成を見出したことに、12世紀ヒューマニズムの最大の特長をとらえている。そのことは「感性と想像力と理性との全人的調和」という言葉に氏の理念と主張とを読みとることができるであろう。

真理到達への道として、異教徒たる古典作家の句を真理に対して価値があるゆえに引用したという指摘や、文の背後にある真理を隠喩や寓意の「被い」*integumentum* から解放して明らかにするという「被いの理論」の摘出、さらには古典を古典として鑑賞し、研究するという視点の欠落を言う論者たちに対し、もしそれが人文主義に不可欠なものなら、12世紀ヒューマニズムなどあり得ないとして氏の提題を熟えている。

他方日下氏は前述の「連続」・「非連続」の問題を手懸りとして次のように論を進める。「より人間的な文芸」*litterae humaniores* がヒューマニズムの不可欠の要素であるとするかぎり、文芸の追放の上に築かれたスコラ哲学全盛の13世紀はヒューマニズムとは無縁の世紀であるというのが氏の提題の骨子である。その視点に立って氏は、「人間本性の価値を強く意識し、自然全体の秩序を認め、人間の理性によって宇宙全体の秩序を探究しよう」(柏木)としたトマス、「自然」と「超自然」との緊張関係における独自の人間把握——神の像 (*imago Dei*) とそれを軸としての「人間的なるもの」への関心を示したトマス・アクィナスを中心にして、13世紀における「学的ヒューマニズム」をめぐる提題をする。

とは言え、「諸学芸の神学への還元」とその諸学芸の座がアリストテレス哲学によって占められてきたこの時期に、三学科を基盤とする12世紀ヒューマニズムとの連続を見出すことは極めて困難である。氏の努力はアリストテレス哲学によってその姿を露わにした学的「自然観」による人間把握と、神の恩寵の光に照らされた人間把握との調和と総合との下に中世の人間像を浮き彫りにすることであつたらうと思われる。

人文主義的ヒューマニズムと理性主義的ヒューマニズムとの二つの潮流を根底にしてのこの提題をもとにしてのシンポジウムは、両世紀での連続・非連続が余りにも明確であり、かつその連続の面が異質的であつたこと、またそれと共に両氏の立

論が余りにも的確であったため異論を唱える余地のなかったこと等から、必ずしも白熱した論議を呼ぶには至らなかったが、それは偏りに司会者たる私の力量不足でもあったのである。

ただその論議のなかで、ギリシア的ヒューマニズム——ペラギウスを中心とする——に対するアウグスティヌスの異端視に、ルターのルネッサンスヒューマニズムに対する批判の原型が見られるのではないかと、13世紀になるとスペインでのイスラムの力がおとろえ、キリスト教国は力をもってこれを制圧しようとした。そのときトマスは、自然理性による、すなわちことばによる談合によって両者が共存しうることを確信し、それを押し進めた。これは人道主義というヒューマニズムのもつ、もう一つの意味を明確化したことでもあり、同時に学的ヒューマニズムと重なり合うものではないか等々、貴重な質疑の行われたことは記憶されなければならない。

昨年度、本年度のこの積み重ねられた論議を受け継いで次年度も『中世後期におけるヒューマニズム』の問題が採り上げられる。会員各位の活発な参加を期待してやまない。

## 提題 十二世紀のヒューマニズム

柏木英彦

I D. ノウルズの見解——11世紀後半から12世紀前半にかけて、とくにフランスにおいて生じた、西欧最初の創造的文化として deep and sympathetic humanism を認める。その特徴は第一に文芸の文化で、古典にたいする delicacy と自己表現力にある。たとえばラヴァルダンのヒルデベルトゥス、ソールズベリのヨハネス。また古代のある人物を賢者として自己の生の規範にし、emotional な共感、すなわち学問の権威としてよりは personal な敬愛の念を懐く。たとえばアエルレドゥス・リエヴァレンシス。かかるヒューマニズムは12世紀後半に衰微する。これにたいしスコラ学では思想の枠組がすべてで、古人にたいする態度は impersonal である。D. Knowls, "The Humanism of the Twelfth Century" (The Historian and Cha-